

ストーマをつけている自分が嫌になった。何か思いもしないことが発生するのではない。不安は益々大きくなる。こんなとき誰かがフォローしてくれたいらよいのに。相談できる場所が有ればいいのに。こんな思いがその後、患者サロンを開催して行く下地となったのだろう。

がんから学ぶ

—がんサロン主宰者が語る—



1937年5月、石川県金沢市生まれ。同志社大学文学部卒。特殊精密機器メーカーの関フキン総務部長兼改革推進室リーダーを経て、1994年3月、1ターンの益田市移住。益田ドライビングスクール合宿型システム作りを依頼される(ガイアの夜明けで放映)。その後、C・T・V創生研究所設立。地域で観光、定住、教育、医療など街おこしを実施。2005年12月、全国初のがんサロン開設。

島根益田がんケアサロン 代表
C・T・V創生研究所 所長 納賀 良一

“患者が望む看護師像”議論

私に付き添ってくれた学生の話をしよう。彼女は大学院に通っていて、専門看護師を目指しているベテラン看護師。既になんか認定看護師のライセンスを持っていた学生。ご主人をがんで亡くし、一念発起。勉強してさらなる上のライセンスを取得するために挑戦中だったのだ。私にとってはまことに幸いであった。普通の学生とは違い、レベルは高く、現役の看護師よりも知識は高かった。1週間、朝から夕方まで付き添ってくれ、私の手術まで立ちあってくれたらしい。そのことは後から聞いた。

心と身体の辛さをどう解きほぐすかが大きな壁となって立ち上がったとき、人は弱くなり、誰かにすがりたくなるものだ。私のその心にも寄り添ってくれた。一番つらい時期を付き添ってくれたのは、本当に有難かった。

患者は弱い。いつも心が折れそうになっている。人生が嫌になる時も多い。なんで自分だけがこんな病気になったのだ

ろうか。その弱い気持ちの自分が立ち直り、強く生きる力になったのはなんだったのだろうか。それは後の章で書いて見たい。

彼女は現在、大阪のY病院に勤務していて、時々メールで情報を交換している。緩和ケアを行っている病院なので見学を兼ねて会いに行きたいのだが、まだ実現出来ない。

数年前から近所にある石見高等看護学院の学生ががんサロンの見学にやって来る。「患者が望む看護師像とは」。こんなテーマで患者仲間と一緒に話をしている。終われば感想文を書いてもらっているが、それを読むのも楽しいものだ。今年3年生全員が益田赤十字病院の実習中にやって来る。

がん教育は私たちから教えるなければならないと思う。学校では教科書はあるが実践的ではない。患者の生の声は教科書には書いてない。その声をもっと聞いて参考にしてほしい。